平成23年度富山県公文書館特別企画展

富山県

越中の旅人たち
～江戸時代の寺社参詣～

善光寺

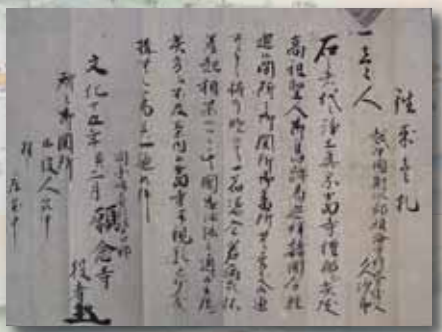
伊勢内宮

「善光寺参りの図」個人蔵

「身延山等道中記」（元治元年）富山県公文書館蔵

開催期間 平成23年 9月30日（金）～11月3日（木） 会期中無休

開館時間 9:00 ～ 17:00 入場無料

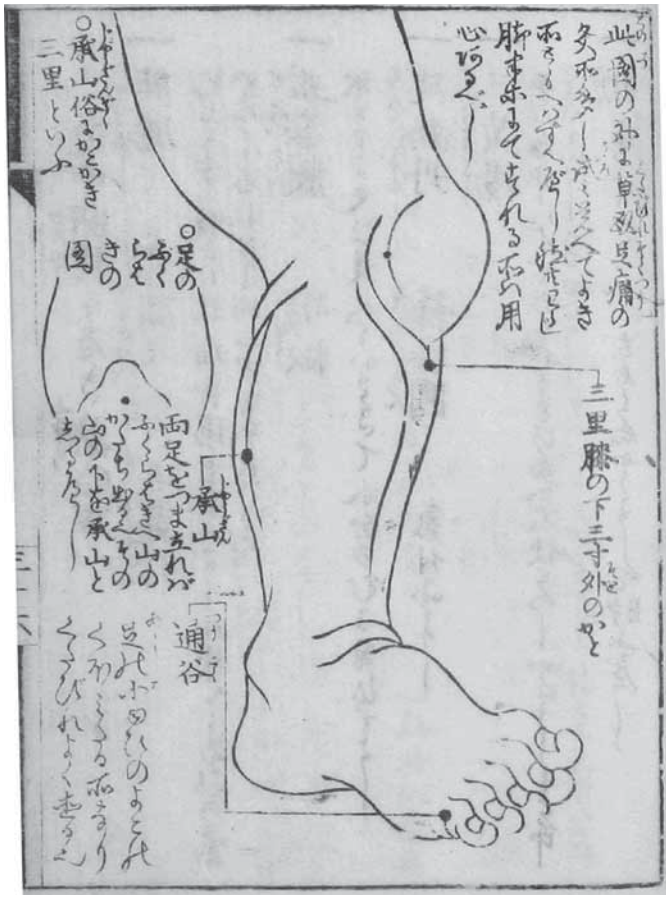


「往来手形」（文化十五年）富山県公文書館蔵

背景「藤田家道中記」（弘化二年）富山県公文書館蔵

目次

開催にあたって……1
旅の手続き
◎往来手形……2
◎関所手形……2
旅行案内書
◎旅行案内書……4
◎浪花講と「浪花講定宿帳」……4
◎旅の心得……5
コラム壱　旅の事故対応……6
コラム弐　立山参詣見舞……6
道中日記等に見る越中の人々の寺社参詣
◎善光寺参詣……7
◎伊勢参詣……8
伊勢参詣ルート図……10
◎身延山参詣……12
◎東本願寺参詣……14
◎親鸞・蓮如・二十四輩旧跡参詣……16
おわりに……18
コラム参　富山藩主の密命による伊勢参詣……18
企画展史料一覧……19
参考文献……20



『旅行用心集』より

開催にあたって

江戸時代、街道や宿場の整備、経済や治安の向上を反映して、庶民生活の中で旅が身近なものとなり、人々は年貢等の負担に苦慮する暮らしの中で非日常を求めて、旅に出ました。目的を、寺社参詣としながら、物見遊山の要素も加味され一カ月を超える長期の旅となることも稀ではありませんでした。

この時代は、旅行案内書の出版、旅館業者組合による安全な宿の整備、旅行案内人の活動、病死人への対応など、旅人の受入システムがつくられ、現代の旅の基本型が出来つつありました。しかし、現代の旅と異なる点は、寺や村、藩が発行する往来手形や関所手形が必要であったことや、親戚や使用人、地域の人々との間で餞別品やみやげ物のやりとりが行われ、まわりの人々の思いを受けとめたものであったことです。また、徒歩と舟での旅は、様々な風景が展開して、印象の深いものになったこと、また故郷の良さも再確認できた旅となったことも想像されます。

富山県には、関西・中部・関東方面への近世の道中日記など多種の寺社参詣関係の史料が残されています。

今回の特別企画展では、越中の人々の旅について、当館所蔵の道中日記等の史資料をもとに、ルート、日数、宿泊代、名所、餞別、土産、そして当時の旅に対する考え方などを紹介します。これを機会に、郷土富山の歴史への関心を深めていただければ幸いです。

今回の企画展を開催するにあたって、多くの方々や機関からご協力を賜りました。ここにご芳名を記して感謝の意を表したいと思います。

立山カルデラ砂防博物館　富山県立図書館　魚津市立図書館　富山市猪谷関所館　富山市郷土博物館　滑川市立博物館
南砺市城端図書館
石井健次郎（富山市）　五十島和男（富山市）　上埜十右衛門（富山市）　海内宏憲（富山市）　城戸拓一（宝塚市）
高安悦郎（富山市）　玉井紀一（南砺市）　丹保俊哉（富山市）　塚本幸史（高岡市）　寺崎寿（富山市）　名苗織道（氷見市）
広野リツ（富山市）　藤井久征（氷見市）

（順不同敬称略）

平成二十三年九月

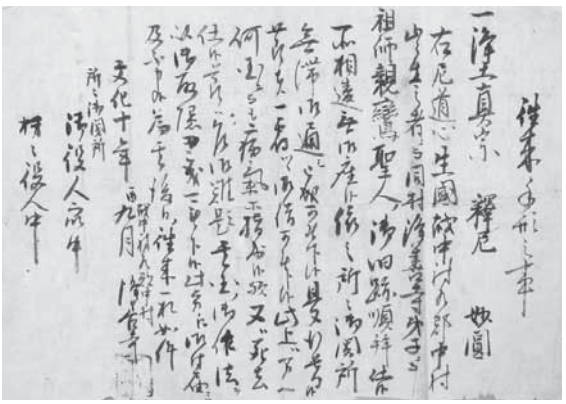
富山県公文書館

旅の手続き

往来手形

江戸時代、人の移動は制限され、正式に通常諸国を旅するに場合には、「往来手形（往来一札）」と「関所手形（通手形・関所証文・関所切手）」の二つの証明書が必要であった。

「往来手形」は、旦那寺、村（町）役人などが身元保証人となり発行するもので、旅の間は携行し、事故などに巻き込まれた際に身分証として提示した。内容は、本人の旅の目的・宗旨・住所・名前・年齢などを掲載すると共に、旅先で死亡した際には当地の方法で葬ってほしい旨が書かれた。例をあげると、文化十年（一八一三）年九月に釈尼妙円が親鸞聖人旧跡巡拝の旅をした時に携帯した往来手形が残っている。檀那寺の浄善寺が本人の生国〔射水郡中村・現、氷見市〕・宗旨〔浄土真宗〕・旅行目的〔親鸞聖人旧跡巡拝〕を証明し、途中行き暮れた場合には旅宿の世話を、死亡した際には当地の方法で葬ることを頼むなど、「往来手形」の典型的な内容となっている。

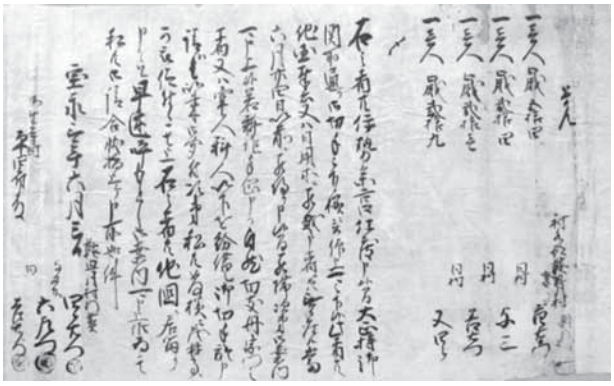


往来手形之事
一　浄土真宗　釈尼　妙圓
右尼道心、生国越中射水郡中村
出生之者ニ而同村浄善寺弟子ニ而
祖師親鸞聖人ノ御旧跡順拝仕候
所相違無御座候、依之所々御関所
無滞御通シ被成可被下候、且又行暮候
節者一宿ヲ、御借可被下候、此上ハ万一
何国ニ而も病気等指出候欤、又ハ死去
仕候節ハ、乍御難題其国ノ御作法ヲ
以御取隠被成可被下候、此方江御付届ニハ
及不申候、為其後日ノ往来一札如件
文化十年酉九月　浄善寺（印）
越中射水郡中村
所々御関所
御役人衆中
村々役人中

広野家文書「往来手形」文化10年（1813）〔富山県公文書館蔵〕

関所手形

関所手形は、関所（幕府設置のものを関所、諸藩設置のものを口留番所と称したが、区別せずに関所と表記することもあった。）を通過するときに提出された。そのため、関所側、例えば関所の番人をしていた家に伝存することとなる。越中国の場合、加賀藩領や富山藩領の国境に設けられた境関所や東西猪谷関所、そして大聖寺関所にかかわる申請書のみ伝存しているので、



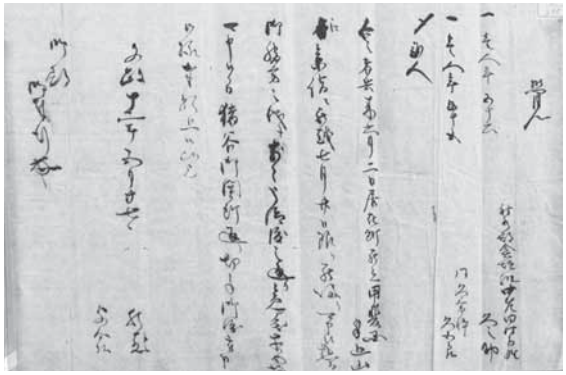
覚
一　壱人　歳五拾四　射水郡鞍骨村　市郎右衛門
一　壱人　歳弐拾四　同村　与三
一　壱人　歳弐拾壱　同村　善右衛門
一　壱人　歳弐拾九　同村　又四郎
〆
右之者共、伊勢参宮仕度申候間、大正持御
関所通り御切手被下候様ニ被仰上可被下候、此者共
他国奉公又ハ日用等ニ罷越申者ニ而ハ無御座候、当
六月廿四日以前ニ罷帰り申候間、罷滞次第御案内
可申上候、若耕作手間申か自然切支丹宗門之
者又ハ牢人科人以下を紛借シ御切手於申
請ハ以来御聞付次第私共如何様ニも曲事ニ
可被仰付候、其上右之者共他国ニ居留り
候ハヽ早速呼もとし御案内可申上候、為其
私共御請合状指上ケ申所如件
宝永三年六月三日　鞍骨村肝煎　四郎右衛門（印）
与合頭　六左衛門（印）
同　吉右衛門（印）
仏生寺村
平四郎殿

藤井家文書「鞍骨村市郎右衛門など四人伊勢参詣につき請合状」宝永3年（1706）〔個人蔵〕

出国する時にはそれらの関所手形が必要であって、他国での関所では手形が必要のない場合や、必要であっても旅籠に依頼して発行してもらうこともできた。左の史料は、大聖寺関所を通過する際に提出する「関所手形」を十村役に申請したものの写しである。

宝永三年（一七〇六）六月三日、伊勢参宮のため、射水郡鞍骨村（現　氷見市鞍骨）市郎右衛門以下四名について、村肝煎四郎右衛門・組合頭六左衛門・同吉右衛門の村方三役の三名が大正寺(大聖寺)の関所手形を十村役仏生寺村平四郎に申請している。内容は、四人の旅の目的は伊勢参宮であって、「他国奉公又ハ日用等ニ罷越申者」、「耕作手間申」、「切支丹」、「科人」ではないことを村役人が請け合い、もし期間を過ぎても帰らない場合は早速呼び戻し、十村役仏生寺村平四郎に報告するというものである。他の史料をあげてみよう。

文政十二年（一八二九）五月二十七日、射水郡倉垣組中老田村（現、富山市中老田）百姓久之助と久三郎倅久五郎の身延山参詣について、猪谷関所の



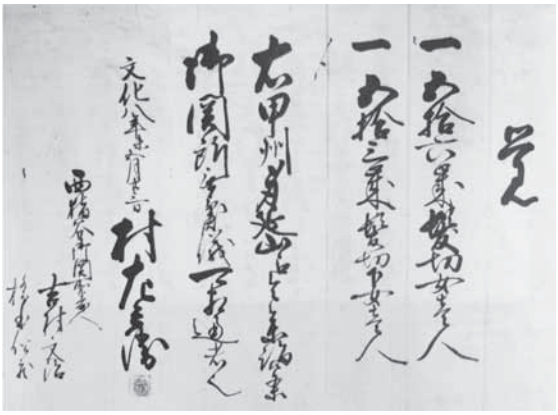
覚

一　壱人年　五十六　　射水郡倉垣組中老田村百姓　久之助
一　壱人年　弐十五　　同久三郎倅　久五郎
〆弐人
右之者共来六月二日居在所罷立甲斐国身延山江参詣ニ罷越、七月廿日限り罷帰り可申候惣而御縮方之儀も前々被仰渡之通り急度相心得可申候間、猪谷御関所通り切手御渡被下候様奉願上候　以上
文政十二年五月廿七日　　肝煎　与合頭
御郡
御奉行　様

海内家文書「中老田村百姓久之助ら二人甲斐国身延山参詣につき猪谷関所過書願書」文政12年（1829）〔富山県公文書館蔵〕

関所手形を肝煎、組合頭が郡奉行に申請したものの写しである。前の宝永三年の史料と較べると簡略化されている。百姓の身分ということで、郡奉行に申請している。

左の史料は、西猪谷関所（富山藩）に提出された関所手形である。身延山参詣を目的とする、文化八年（一八一一）、五六歳と五三歳の女性二名の関所手形である。ここでは、関所番人の吉村文治・橋本伴蔵宛に、富山藩の規定どおり、女性については身分を問わず家老（村左兵衛）が発給している。



覚

一五拾六歳　髪切女　壱人
一五拾三歳　髪切女　壱人
〆
右甲州身延山江令参詣候条御関所無義可相違通者也
文化八年未五月廿三日　村左兵衛(印)
西猪谷関所番人
吉村文治
橋本伴蔵

橋本家文書「五拾六歳髪切女壱人五拾三歳髪切下女壱人甲州身延山参詣につき過書」文化８年（1829）〔富山市猪谷関所館蔵〕

旅行案内書

旅行案内書

英国の外交官アーネスト・サトウ著『一外交官の見た明治維新』には、日本人は大の旅行好きである。本屋の店頭には、宿屋、街道、道のり、渡船場、寺院、産物、そのほか旅行者の必要な事柄を細かに書いた旅行案内の印刷物がたくさん置いてある。

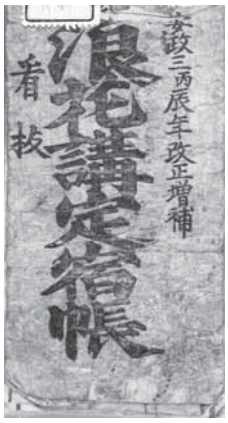
との記述がある。これは、慶応三年（一八六七）に大坂から江戸へ東海道を駕籠（かご）で旅した時の記述であるが、日本人の旅好きとともに、旅行案内に関る印刷物が多種販売されていたことを示している。このように、旅ブームを背景に地図（日本全図・江戸大坂などの地域図）、全国の街道が記されている道中記「廿四輩御旧跡道しるべ」などの名所記（江戸・大坂・京・伊勢などや宗祖旧跡など）、旅の心得（「旅行用心集」）、旅籠組合発刊の安全な宿（「浪花講定宿帳」）、買物のために商品別に店を記したもの（「江戸買物獨案内」）など、旅の情報をまとめた様々な印刷物が販売された。また、文字や絵の情報を冊子、折り本にしたてることにより、懐中に入れられるよう工夫されている。「大日本早見道中記」は海内家のように身延山道中日記が残されている家に伝存したもので、旅の途中で購入し、使用したのではないかとも推測される。また、藤田家の「道中記」のように富山から江戸までのルートについて必要に応じて個人的に作製したものもある。

上埜家文書「天保改正袖中京絵図」（1841）〔富山県公文書館蔵〕

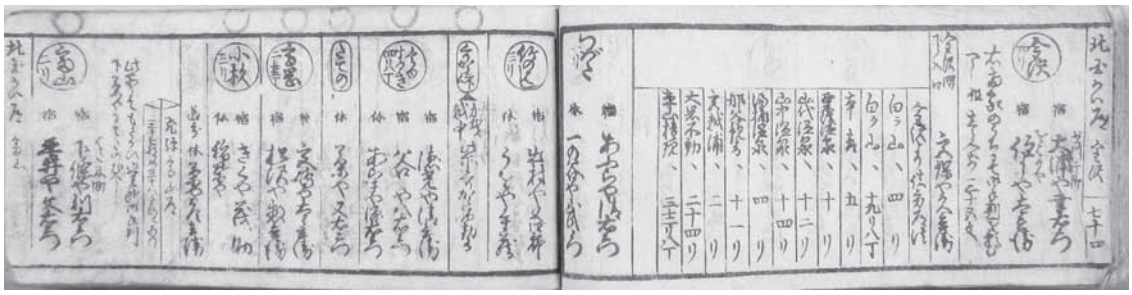
浪花講と「浪花講定宿帳」

江戸時代に幕府による街道、宿駅制度が整備されたことにより、人々にとって旅が身近なものとなった。しかし、いっそうの安全性の確保を目的として、大坂玉造に拠点をおき、全国に行商していた松屋甚四郎と手代のまつ屋源助は、旅人に安全な旅を提供しようと文化元年（一八〇四）に旅籠の組合である「浪花組」、後の「浪花講」を立ち上げた。この浪花講に加盟する旅籠や茶屋では、「旅人の賭け事、遊女を買う事・酒を飲んで騒ぐ事」等を禁止し、浪花講の看板を掲げることにより、旅人への目印とした。また、旅行案内書等を発刊し、旅人は定宿帳に記載された街道を歩き、鑑札を提示することにより安心して宿をとることができた。

次の史料は、浪花講が安政三年（一八五六）に発刊した「浪花講定宿帳」である。全国の浪花講に加盟する旅籠や茶屋が記されている。富山・小杉・高岡・立野・今石動・倶利伽羅峠・竹橋・津幡・金沢にある茶屋や旅籠名が列記されている。



「浪花講定宿帳」（表紙）



「浪花講定宿帳」金沢から富山までの浪花講加盟店（旅籠・茶屋）が名を連ねる。安政3年（1856）〔富山県立図書館蔵〕

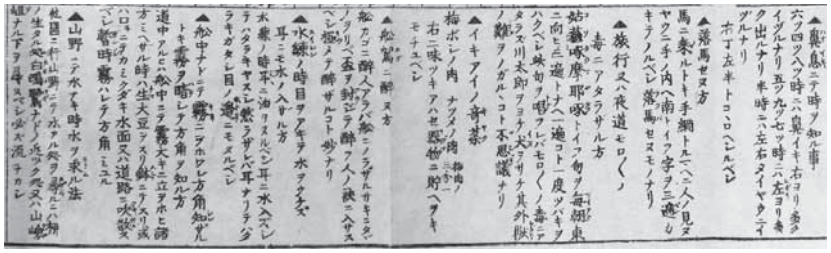
旅の心得

旅を安全に、より快適に楽しく過ごすために、様々なトラブルの回避策を心得として記した案内書が作成された。また、日常生活における教訓も取り入れられたことは想像に難くない。これらの旅行案内書を年代順に、特徴的な内容を抜き出してみる。

「大日本道中行程細見」巻末には、街道を描いた道中記の後に、旅の心得が記されている。夜、山や船中、水の中などで発生するいわば自然発生するトラブルを回避する方策について八項目があげられている。

一　鼻息ニテ時ヲ知ル事
二　落馬セヌ方
三　旅行又ハ夜道モロモロノ毒ニアタラザル方
四　イキアイノ奇薬
五　船駕ニ酔ヌ方
六　水練ノ時目ヲアキテ水ヲウケズ耳ニモ水ノ入ザル方
七　船中ナドニテ霧ニヲホワレ方角知ザルトキ霧ヲ晴シテ方角ヲ知ル方
八　山野ニテ水ナキ時水ヲ求ル法

とあり、三については、「姑蘇啄摩耶啄」（こそたくまやたく）と真言を唱えれば、毒にもあたらず、河童や犬も避けられるとしている。四の「イキアイノ奇薬」は、呼吸を整え元気をつけるための薬の意味であり、梅と棗を混ぜたものを用いるとある。七では、大豆をすり潰して、水面や道路に撒けば霧が晴れて方向がわかるとし、八では、鴎や鷺などの近づく所や、山険阻な所の下には水があるとしている。あやしげな方策であるが、徒歩や船、馬で移動する上で生じる自然現象によるトラブル解決に焦点をあてた心得となっている。



広野家文書「大日本道中行程細見」寛政７年（1797）〔富山県公文書館蔵〕

「旅行用心集」は、旅の心得を完全網羅したもので、旅で起きる様々な回避策が記されている。「初て旅立の日ハ別而静に踏立、草鞋の加減等を能試、其二、三日が間は所々にて度々休、足の痛まぬようにすべし。出立の当坐には、人々心はやりておもはず休もせず、荒く踏立るものなり」とあって、旅の二日三日は、草鞋の具合を見ながら、休みながらいきなさいとか、「道中所持すべき品の事」では、「矢立　扇子　糸針　懐中鏡　日記手帳（一冊）　櫛并ニ鬢付油　提灯　ろうそく　火打道具　懐中付木　麻綱　印板」があげられている。「一通の旅にて格別に急ぐことなくば、夜道決而すべからず、都而旅は九日路の所ならば十日にて行かんとすれば、いそぎて夜道等するよりも猶益多きこと有ものなり」とあって、特別な理由がなければ、夜道を行ってはならない、旅には時間の余裕が必要であるとしている。文化論的な内容として、「皆人他国へ出れば、物いひ、風俗いろいろに替て、己が国言葉に違ふ故に、聞馴、見なれぬ中はおかしと思ふなれど、又先の人も此方をおかしと思ふハ必然なり。しかるを心得ちかひして、他国の風俗、ものいひ等笑なふること、誤としるべし」とあって、文化の違いにとまどうことは必然のことだが、軽蔑することは間違っているとしている。

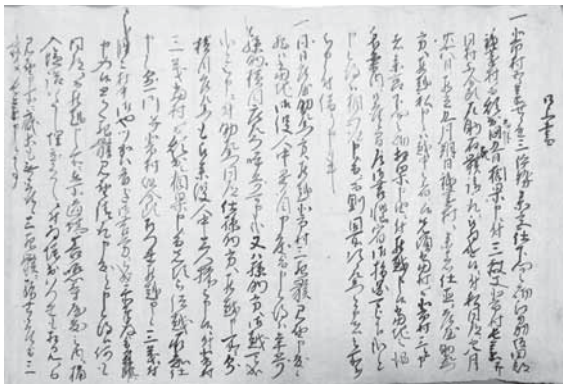
「浪花講定宿帳」は、旅籠での危険回避策が特色で、「はたご安くともあやしき宿にとまるべからず、又ひとり旅の女を道づれにすべからず」、とあって、人間関係中心の内容となっている。「旅人御心得」には、客が旅籠内で注意すべきこととして、

一、諸法度の懸勝負被成候御客宿いたし不申候事
一、遊女買被成候御客御宿いたし不申候事
一、宿にて酒もりいたし高声にて騒ぎ被成候御客御宿いたし不申候事
一、御用向相済不用にて逗留被成候御客御宿いたし不申候事
一、定宿の心得は御客御着の節、当主火の用心の為見廻一間一間、夜中行燈の燈火きれざるよう油つぎ方沢山にいたし置事

とあって、勝負事の禁止、遊女買いの禁止、酒盛大騒ぎの禁止、長い滞在の禁止、夜中行灯の燈火が消えないように油を注ぎ足す、といった客が宿泊中に守るべきルールについても示している。

コラム壱　旅先の事故

比較的安全な旅ができた江戸時代ではあったが、極度の疲労を伴う当時の旅では、病気になったり、そのまま病死してしまう旅人は珍しいことではなかった。元禄十二年（一六九九）八月九日、伊勢参宮を済ませて越中国北市村（現、富山県南砺市北市）へ帰る途中、祇園村（現、滋賀県長浜市祇園町）で死亡した旅人の史料が残っている。旅人の名は「三」、親族や北市村役人らによる遺体の確認から、当地での埋葬までの経緯を報告している資料で、当時の生々しい状況を伝えてくれる。他国での死亡は、遺体の引取など、その領地を支配する藩を含め、村と村との話し合いによって問題解決が図られた。往来手形の文言のように、当地の作法で一方的に取り計らわれたわけではなかった。



玉井家文書「北市村五郎兵衛倅三の伊勢参詣下向時に江州坂田郡祇園村にて死亡のため遺体引取一件につき上申書」元禄12年（1699）（個人蔵）

北市村三の伊勢参詣下向時死亡一件についての経緯

近江坂田郡祇園村より、元禄12年（1699）年8月9日に北市村五郎兵衛倅三が伊勢参詣から帰る途中で死亡したとの知らせが届く。

8月26日　北市村三の叔父長兵衛・組合頭左助・十村手代宗右衛門が祇園村へ出立する。

9月1日　祇園村役人の年寄孫助、横目庄左衛門、庄屋助左衛門立ち会いの上、村の善照寺に塩詰めして埋めてあった三の遺体を掘り出して見届ける。
遺体は三であることを叔父長兵衛が確認する。

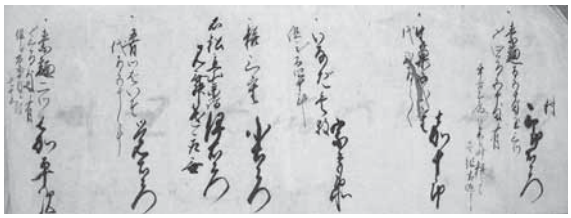
9月 2日　改めて三の遺体を善照寺に埋葬する。

9月 3日　北市村人祇園村を出立する。

コラム弐　立山参詣見舞請帳

立山参詣は成人となるための通過儀礼でもあった。石井家文書には、「立山参詣見舞請帳」が江戸期のものでは「吉次郎」、「源之助」及び「年十三歳正吉」文政五年（一八二二）の三点、明治期のもの「石井豊二」一点が残されていて、石井家の男子は、少なくとも江戸期から明治期にかけて立山参詣を行っていたことがわかる。この見舞請帳には、草島村や近隣の村々（海老江・東岩瀬・西岩瀬・明神）の人々からの見舞品として、「素麺」、「生菓子」、「まんじゅう」「いなだ」、「餅」、「つばいそ」、「干いか」などが記されている。

表紙



石井家文書「立山参詣見舞請帳（吉次郎）」（富山県公文書館蔵）

道中日記等に見る越中の人々の寺社参詣

道中日記

「旅行用心集」には、旅の嗜みとして道中日記をつけることが記されているが、これは本人の旅の記録とともに、後世の旅人の参考とするために作成された。例を上げると、嘉永元年（一八四八）五月の陸奥国江差黒石村（現岩手県奥州市）の作太郎の道中日記（「伊勢参宮道中記」）の文末には、

文政八年之年鵜木長右衛門殿参宮仕道中記を願上、拙者義持参致し嘉永元年申年五月十五日相立申候也、八月廿五日帰宅仕、先大概書記候得共、紙筆に尽くしかたし、何方之御人様参り候ても名所掛所御気を付て御廻りならるべく候、以上

との文言が記されている。内容は、今回の伊勢参詣にあたって、文政八年（一八二五）に伊勢参宮を行った鵜木長右衛門の道中日記を借り、また本人作太郎も今回の旅の大概を書いたと述べている。最後にこれから旅をする人に注意を促していることから、後世他人に読まれることを意識して書いていることがわかる。というわけで、道中日記は後世の旅人にとって情報源の一つでもあった。

今回の展示史料から、道中日記の主な項目を上げると、日付・参詣または訪れた寺社や名所、峠名・川名・山名・道の状態（坂道・平坦な道）・関所（通りやすさ）・宿場名・街道名・天気・宿泊先・茶屋名・宿泊代・昼食代・茶代・草鞋代・舟賃・土産物代・按摩代・酒や餅などの飲食物などの代金、寺社の来歴・賽銭や開帳料などがあげられる。

また、道中日記や別帳に旅の門出に餞別として贈られた品目とその数や人名、旅の土産の品目とその数や人名が記されていて、旅が個人的なものだけではなく、村人や縁者を巻き込んだものであったということがいえる。

旅人は、二〜三日で草鞋を取り替えながら、自分の足で一日平均約四十キロメートルを旅した。その過程で、様々に体験される異文化体験は、越中富山の良さをあらためて認識することにつながったに違いない。

善光寺参詣

善光寺への参詣については、『大山町史』（一九六四）所収「寛政十二年申六月朔日出立覚」長棟村（旧大山町福沢村）の善光寺参詣史料に基づいて、旅人名・性別・人数・ルート・日程を割り出した。長棟村では、伊勢参詣と善光寺参詣を行っていたようである。

文政十三年（一八三〇）の善光寺参詣についての記事を見ていくと、三月二十六日出立。帰村は、閏三月十四日、十九日間の旅である。

他の道中日記に見られるような周遊するのではなく、善光寺参詣を終えると同ルートで帰村している。

男性〔三人〕甚右衛門、長右衛門、清蔵倅
女性〔四人〕甚右衛門妻せつ、清蔵姉、平右衛門母、忠左衛門妻　計七名

長棟村甚右衛門ら七人の善光寺参詣日程

	宿泊地	宿　　名	備　考
3月26日	牧村	吉河原	男女分宿
		舟津村東町	
3月27日	寺林村	藤蔵	男女分宿
	あらや村	三右衛門	
3月28日	高山	高山二番町川上や文右衛門	
3月29日	中洞村	中洞村六蔵	
3月晦日	野麦村	善蔵	
閏3月1日	古宿村	たつみや吉左衛門	
3月2日	さみぞ(三溝)	いとや	
3月3日	浅間	ひものや仲七	
3月4日	をみ村（麻績）	新三郎	
3月5日	善光寺	飛禅坊	
3月6日			
3月7日			
3月8日	一の川村(市野川)	一の川村七郎兵衛	
3月9日	松本	いのや弥平	
3月10日	にらやま村	儀八	
3月11日	野麦村	善蔵	
3月12日	山口村	十右衛門	
3月13日	舟津村	杉山や長蔵	
3月14日			

「寛政十二年申六月朔日出立覚」より作成

伊勢参詣

伊勢参詣は、寛政二年（一七九〇）「伊勢参宮道中覚帳」（塚本家文書）の道中日記からルート、宿泊地、宿賃、参詣場所などを整理した。旅人は、中川村庄三郎及び本松村長右衛門の二名である。この日記の作成者は、庄三郎で、代々二上組十村役南善左衛門家の手代をしていた。

〔ルート〕

五月十五日に高岡を出発して、金沢→大聖寺→水落→中河内→木之本→春照→尾西へと進み、五月二十一日名古屋着。四日市→関→津を過ぎ、五月二十五日伊勢到着。伊勢参詣に旅立って十日目のことである。帰りは、田丸町→つる村→大石村→山粕村→多武峰→吉野へ行く。五月二十九日に吉野を立ち殿野村→野川村→高野山→宇野村→竜田→奈良→宇治をぬけ、六月七日に京都到着。伊勢を発ってから十日目。京都に滞在し、大坂住吉まで行き、二日で京都に戻り祇園祭を見て、六月十五日に出発。その後、比叡山→坂本→石山→高宮→柳ケ瀬→府中を通り六月十九日に大聖寺到着。翌日山中温泉に泊まり、松任へと進み二十二日に帰郷している。この間三十八日に及ぶ大旅行である。伊勢参詣を遂げるとすぐに同じルートを通って帰路に着くのではなく、吉野・高野山・奈良・京都・大坂へと参詣の旅に出ている。

〔宿泊場所と宿賃〕

宿の種類は、旅籠・木賃宿・宿坊の三つに分けられる。旅籠では一人平均一五〇文、木賃宿では泊り代三十五文、米代三十五文、宿坊では泊り代二十五文、米代三十五文を支払っている。宿坊は高野山成就院、木賃宿は津留村専福屋宗兵衛・山粕村酒屋・竜田かわらや、などがあった。

〔参詣場所の特徴〕

この道中日記の表紙には、「伊勢参宮道中覚帳」とあるが、伊勢での滞在日数は一日で、参宮は行っているものの伊勢御師の屋敷で宿泊はしておらず、また賽銭などの記載もない。このことから伊勢参詣は名目であって、旅の本来の目的でないことが考えられる。むしろ京都では七日間滞在して、寺社や祇園祭を見物し、大坂でも二日間過ごし、奈良の寺社も数多くまわっている。また、吉野・大峰山といった険しい修験道関係の名所にも足を運んでおり、精力的に寺社参詣や物見遊山を行っている。

参詣場所及び名所一覧表

名　所	寺	神　社	地　蔵	観　音	不動明王	その他
多武峰	専修寺	熱田神宮	木之本地蔵（浄信寺）	甚目寺観音（甚目寺）	大石不動院	西の京の寺々
吉野山	松坂愛宕（竜泉寺）	津嶋天王（津嶋神社）	関地蔵（宝蔵寺）	長谷観音（長谷寺）		
高野山	岡寺	伊勢神宮		壺坂観音（南法華寺）		
比叡山	当麻寺	天河大弁財天女社		三室戸観音（三室戸寺）		
名古屋城	達磨寺	三輪明神（大神神社）		那谷観音（那谷寺）		
なに八屋〔松〕	法隆寺	龍田神社				
妙国寺〔蘇鉄〕	奈良大仏（東大寺）	奈良明神				
淀城〔水車〕	万福寺	住吉大社				
唐崎神社〔松〕	京都大仏（方広寺）	石清水八幡宮				
膳所城	三井寺	日吉大社				
瀬田唐橋						

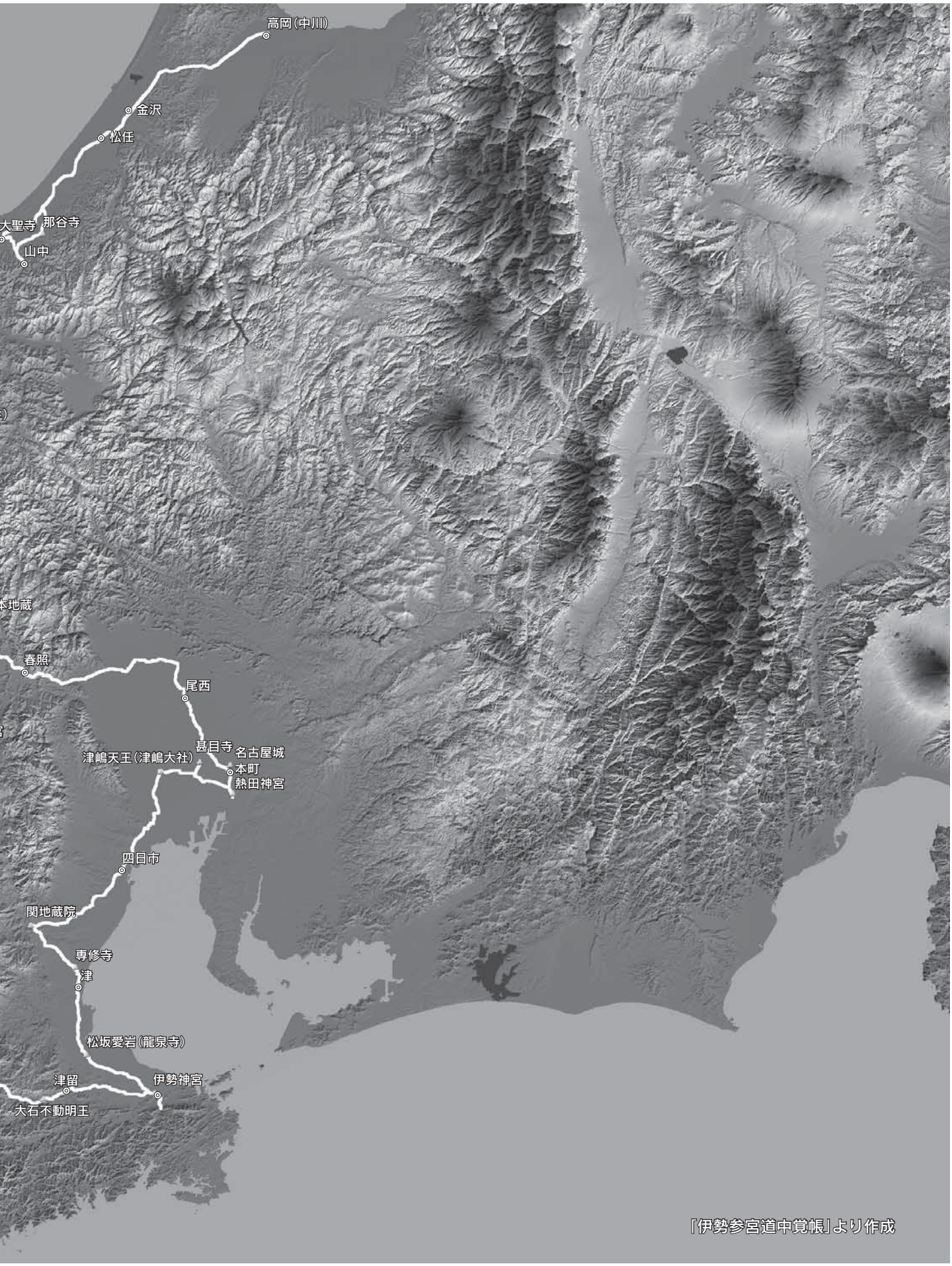
塚本家文書「伊勢参宮道中覚帳」寛政2年（1790）〔個人蔵〕より作成

庄三郎ら宿泊地・参詣寺社及び諸経費表

（文）

月　日	宿泊場所	里程	宿　　名		宿賃(1人分)	舟賃(2人分)	開帳	参　詣　場　所
5月15日	金　沢	12	合羽屋仁左衛門	旅籠	150	35		
16日	大聖寺	13	田中屋伊兵衛	旅籠	135			
17日	水　落	12	肴屋又左衛門	旅籠	141			
18日	中河内	13	越中屋八左衛門	旅籠	140	7		木之本地蔵(浄信寺)
19日	春　照	12	北国屋小左衛門	旅籠	115			
20日	尾　西	12	越前屋栄助	旅籠	125	40		
21日	名古屋本町	7	たはこ屋久兵衛	旅籠	150			熱田神宮・名古屋城
22日	四日市	12	伊勢屋源左衛門	旅籠	150	88		津嶋天王(津嶋神社)・甚目寺観音(甚目寺)
23日	津	12	八百屋理兵衛	旅籠			50	関地蔵(宝蔵寺)・専修寺
24日	山　田	9	辻屋伝兵衛	旅籠	150			松坂愛宕(竜泉寺)
25日	つる村	6	専福屋宗兵衛	木賃	35			伊勢神宮
26日	山粕村	12	酒　屋	木賃	79			大石村不動明王
27日	多武峰門前	9	(多武峰門前)	旅籠	140			長谷観音(長谷寺)・三輪大明神(大神神社)・多武峰明神(談山神社)
28日	吉　野	8	谷村権左衛門	木賃	79			安部文殊院・岡寺・高取城・壺坂観音(南法華寺)
29日	殿野村	10	花　屋	木賃	40			吉野大峰山
6月1日	野川村	1	明王院(妙音院)	木賃	50			天野村信長建立の弁財天
2日	高野山	5	成就院	旅籠				高野山奥の院
3日	宇野村	8	猟屋善六	旅籠	124	6		
4日	竜　田	11	かはら屋	旅籠	81		160	大麻寺・達磨寺・龍田明神(龍田神社)
5日	奈　良	7	松屋伊兵衛	旅籠	150			法隆寺・西の京の寺々・奈良明神・奈良大仏(東大寺)
6日	京都御池上り	10	大文字屋源助	旅籠		14		宇治みもろ観音(三室戸寺)・万福寺・京都大仏(方広寺)
7日				旅籠				祭
8日				旅籠				
9日	(伏見より舟で移動)							
10日	大坂長町	10		旅籠	150			住吉大社・なに八屋(松)・妙国寺(蘇鉄)
11日	石清水八幡宮門前	7		旅籠				淀城(水車)・石清水八幡宮
12日	京都御池上り	11	大文字屋源助	旅籠				
13日				旅籠				祇園祭
14日				旅籠				祇園祭
15日	石　山	8		旅籠				比叡山山王権現(日吉大社)、唐崎の松、三井寺、膳所城、瀬田の唐橋
16日	高　宮	13		旅籠				
17日	柳ケ瀬	11		旅籠				
18日	府　中	14		旅籠				
19日	大聖寺	11		旅籠				
20日	山　中	8		旅籠				
21日	松　任	13		旅籠				那谷観音(那谷寺)
22日	高岡(中川村)	20		旅籠				

塚本家文書「伊勢参宮道中覚帳」寛政2年(1790)〔個人蔵〕より作成


高岡（中川）
金沢
松任
大聖寺
那谷寺
山中
本地蔵
春照
尾西
甚目寺
名古屋城
津嶋天王（津嶋大社）
本町
熱田神宮
四日市
関地蔵院
専修寺
津
松坂愛岩（龍泉寺）
津留
伊勢神宮
大石不動明王
「伊勢参宮道中覚帳」より作成

伊勢参詣ルート図

水落
府中（武生
中河内
柳ケ瀬
木之本
高宮
日吉大社
方広寺大仏
石山
淀城（水車）
石清水八幡宮
宇治みもろ観音（三室戸寺）
奈良
大坂長町
住吉大社（難波の松）
妙国寺・蘇鉄
法隆寺
達磨寺
当麻寺
長谷観音（長谷寺）
安部文殊院
山粕
多武峰明神（談山神社）
壺坂観音（南法華寺）
宇野
吉野
天河村弁財天
野川
殿野

身延山参詣

中老田村肝煎役を務めた海内家には、多数の身延山参詣に関する史料が残されている。その史料を年代順に並べると

①「身延山鎌倉江戸北国海道道中記」〔文化元年（一八〇四）〕
②「中老田村百姓久之助ら二人、甲斐国身延山参詣につき猪谷関所過書願書」〔文政十二年（一八二九）〕
③「諸山参詣御見舞覚帳」〔天保三年（一八三二）〕
④「身延山霊宝目録」〔嘉永元年（一八四八）〕
⑤「道中諸書留帳」〔安政四年（一八五七）〕
⑥「霊場参詣につき諸方見舞貰覚」〔安政五年（一八五八）〕
⑦「身延山等道中記」〔元治元年（一八六四）〕
⑧「身延山道中記」（幕末）

となる。この内、道中日記は、①⑤⑦⑧の四点である。②は、猪谷関所通行手形の申請書、③⑥は、旅に出るにあたっての餞別や旅土産を記録したものである。以上から計七回分の身延山参詣の史料が残されている。さて、「久五郎」の署名のある⑧の道中日記から今回のルート図を作成した。年紀は不明だがペリー来航後の記事があり幕末頃と考えられる。六月二日出立して、七月九日に帰村している。長期の三十七日間の行程である。

〔ルート〕

飛騨街道→中山道→甲州街道→東海道→三浦半島の浦賀から→房総半島の鋸山南元名に船で渡り→房総半島を北上して江戸→板橋から中山道→追分から北国街道→北陸道の順で周遊して帰郷しているのが特色である。

⑤の道中日記も同様のルートで旅をしている。①⑦の道中日記は房総半島には渡らず、鎌倉から江戸へのルートをとっている。どちらにしても身延山やその周辺の参詣にとどまらず、鎌倉・江戸の寺々も参詣の対象となっている。

〔口留番所と関所〕

どちらも「関所」と表記され、「無邪魔」の言葉が添えられており、通過することに概ね支障はなかったことがわかる。これらの関所についての描写は少ないが、根府川関所（箱根関所の脇関所）では、「ねぶ川と申所に御関所あり、役人五六人並居、石火矢五丁、鑓五筋其外、弓矢鉄砲之道具立ならべ厳重番所也、然共入には無邪魔」とあって厳重な様子であるが、通過には支障ないとしている。

〔参詣場所〕身延山参詣ということで有名日蓮宗寺院が多いが、以下のような宗祖日蓮に直接関係のある寺や旧跡を参詣している。

甲斐　鵜飼山遠妙寺 休息山立正寺 小室山妙法寺 身延山久遠寺
駿河　玉沢妙法華寺　仏光寺
伊豆　大成山本立寺
相模　比企谷妙本寺　松葉谷妙法寺
上総　祖御疵洗水井戸 袈裟掛の松 小湊山誕生寺 正中山法華経寺
江戸　雑司が谷子安鬼子母神堂 長栄山大国院本門寺 長広山立法寺

〔江川家菩提寺へ参詣〕

①⑤⑦⑧すべての道中日記共通の記事として、「韮山代官江川（河）太郎左衛門」の名が出てくる。例えば⑧の道中日記には、「ねら山乃御代官江川太郎左衛門様江行キ同所寺江参詣仕」とある。日蓮と江川氏は関係が深く、韮山代官所近くにある江川家菩提寺大成山本立寺も日蓮の旧跡の一つとされているので、この寺に参詣したものと考えられる。

〔外国製品の購入〕

他の道中日記にはない記事として、⑦「身延山等道中記」には、「三分弐朱ト百文　ごろふくれん　横浜唐人屋敷ニ而」とあって、日米修好通商条約後の外国貿易の地として発展した横浜で、外国人から「呉絽服連（ごろふくれん）」という輸入品の織物を高額で購入した記述がある。

〔餞別と土産〕

⑥「霊場参詣につき諸方見舞貰覚」には、中老田村の村人を中心に餞別と土産の一覧が記載されている。餞別には、素麺が一番多く、饅頭・餅・酒・蒟蒻・魚・油揚などがある。また、土産は手拭が一番多く、御札・団扇・江戸絵・数珠・扇子・草履などを渡している。

身延山参詣宿泊地及び諸経費表

(文)

	里程	宿泊地	宿　名	宿賃	舟賃	渡　　場	参詣寺社など
6月2日		楡原		89	10	舟橋、笹津渡、籠	
6月3日	8	さんがら村		130	14	さんがらの渡	
6月4日	9	高山		115			
6月5日	9	かみがはら村		125			
6月6日		寄合人村		114			
6月7日	11	洗馬		132			
6月8日	9	金澤		132			
6月9日	10	韮崎		108			
6月10日	8	鵜飼		124	24		鵜飼山遠妙寺、休息山立正寺(番神堂・七面堂・客殿)
6月11日	8	鰍沢		134			小室山(本堂・祖師堂・位牌堂・客殿)、子安鬼子母神
6月12日					40		身延山久遠寺、波木井山円実寺
6月13日	6	身延山	智寂坊	600			七面山奥院
6月14日							東谷の寺々
6月15日		南部		124			七面山(祖師堂・御真骨古仏堂・三門)
6月16日	18	三嶋		150		富士川	西行村(西行墓)、三嶋明神
6月17日		宇佐美					玉沢妙法華寺(客殿・祖師堂・諸堂)、大成山本立寺、仏光寺
6月18日	8	伊東					
6月19日	11	米神		164			
6月20日	10.5	下依智			24	酒匂川	
6月21日	7.5	片瀬		150			
6月22日	7	浦賀	大田屋藤右衛門	164			比企谷妙本寺　松葉谷妙法寺
6月23日		大山		136		浦賀	
6月24日	8	植野		164			祖御艀洗水井戸 袈裟掛の松　小湊山誕生寺(本堂・諸堂)
6月25日	12	長柄山					
6月26日	11	中山		116	5	市川	正中山法華経寺
6月27日	8	池上本門寺前	千歳屋	164			
6月28日	6.5	浅草寺前		200	6	戸川	
6月29日	2.5	蕨		164			どぶ棚　江戸城　本郷加賀屋敷
7月1日	12	熊谷		164			
7月2日	12	板鼻		164			
7月3日	10	追分	越後屋伝兵衛	164			
7月4日	13	戸倉	本ト屋四五右衛門	164			
7月5日	12	野尻	本陣	150	45	屋代・丹波島	
7月6日	12.5	長浜	本陣	150			
7月7日	14	外波		150			
7月8日	11	魚津		150			
7月9日	8	居村					

⑧「身延山道中記」より作成

土産・餞別一覧

	餞　　別				土　　産							
下女					手拭	1						
下女					手拭	1						
下男					手拭	1						
下男					手拭	1						
長松	酒	1			手拭	1						
覚兵衛	油揚	10			手拭	1						
銀右衛門	こんにゃく	15			手拭	1						
彦三郎	素麺	3			手拭	1	団扇	1				
善右衛門	餅	2			皮草履	1	江戸絵	1				
清八	こんにゃく	10			御札	3	江戸絵	1	数珠	1		
藤右衛門	饅頭	2			御札	3	氷餅	1	数珠	1		
孫六	餅	2			御札	3	団扇	1	数珠	1		
久之助	いなだ魚	1			御札	3	団扇	1	数珠	1		
八郎兵衛	素麺	2			手拭	1						
宗次郎	素麺	3			団扇	1	江戸絵	1				
六左衛門	豆腐	1			団扇	1	江戸絵	1	虫眼鏡	1		
庄右衛門	素麺	3			団扇	1	江戸絵	2	氷餅	1		
清右衛門	素麺	2			団扇	1	縮緬切れ	1				
老田屋善兵衛	素麺	2			団扇	1	縮緬切れ	1				
堀岡新村　佐左衛門	魚	2匁 5合			団扇	1	草履	1	御札	1		
新開　清兵衛	素麺	2			手拭	1						
瀧川源太郎					手拭	1	小絵本	1				
重次郎	饅頭	2			団扇	1	七つ玉子	1	江戸絵	1		
長兵衛	饅頭	2			手拭	1	絵本	1				
紋三郎	干烏賊	2			手拭	1						
三十郎	素麺	2			手拭	1						
忠次郎					手拭	1						
羽根ノ家来					手拭	1						
清助	素麺	5			手拭	1	団扇	1				
作道村　治三郎	素麺	3			御札	1	数珠	1	江戸絵	1		
羽根村　長兵衛	酒	2	餅	3	御札	1	草履	1	扇子	2	江戸絵	1
ト山　マキヤ　伊三郎	素麺	3			御札	1	草履	1	団扇	1		
ト山　志甫屋　伊兵衛					御札	1	扇子	2				
喜兵衛	餅	3			手拭	1	団扇	1				
治右衛門					桜花積	1	団扇	1				
乗福寺信雄					桜花積	1	団扇	1				
高岡御聖人様					桜花積	1						
道番市兵衛	素麺	2			御札	1	手拭	1				
新右衛門	素麺	2			手拭	1						

※桜花積とは曲物のこと。

⑥「霊場参詣につき諸方見舞貰覚」より作成

土産品目表

品　目	数
手拭	20筋
団扇	13本
扇子	4本
御札	17枚
江戸絵	9枚
数珠	5連
草履	4足
桜花積	3曲
縮緬切	2枚
絵本	2冊
氷餅	2袋
虫眼鏡	1個
七つ玉子	1個

餞別品目表

品　目	数
素麺	34つ
こんにゃく	25枚
油揚げ	10枚
餅	7重
饅頭	6重
酒	3升
いなだ魚	1匹
魚	2.5匁
干烏賊	2抱
豆腐	1箱

東本願寺参詣

寺崎家文書「寛政九年上京ニ付道中ノ事書帳」をみると、史料の冒頭に「六條参詣の人々」とあり、旅の目的は京都東本願寺参詣である。旅人は、この道中日記を作成した願海寺村の久兵衛と古んや（紺屋）・同人妻・市三郎・庄兵衛の五人である。寛政九年（一七九七）七月一八日出発、閏七月一三日帰着、日数二十五日と記されている。

北陸道から中山道そして東海道を通り京に滞在して、帰りは東海道・中山道・北陸道を通って帰宅している。

この旅の宿は、木賃宿が多く米代含めて一人当たり約一〇〇文支払い、お茶を飲み、草鞋を買いながら旅を続けていた様子をうかがうことができる。

女性の関所の通行については、関所手形が随所で必要であったらしく、「福井此所女ハ手形入ル」、「板取此所女子手判相渡置申候」「柳ケ瀬ノ関ニテ通ル月日女ノ年数申上置ク右帰リニ此通リ言上申事ニ御座候」にみられるように、福井、板取、柳ケ瀬では手形の提出や提出後再度関所を通る時には、手形提出月日、年齢を言上しなければならず、女性には厳しくなっていることがうかがえる。

経費については、史料末尾にまとめられていて、宿泊費三貫二百八十文、茶代九三五文、買物五貫四二一文、合計九貫六三六文としている。一日平均の宿泊費約一三七文、茶代三七文、すべて割勘の数値が記されている。また、買物に多くの金銭を費やしていて、京での買物は、ウチシキ（打敷）一二文、数珠三〇〇文、女はなかみ入（花紙入）三一八文、きんちゃく・たばこ入三三〇文、さかずき三六文など合計五貫四二一文を使っている。東本願寺では、御剃刀二三文、盃一三文、法名八朱八歩、御文二二文八分とある。

旅の目的である東本願寺参詣の期日は記されていないが、剃髪を行い、法名をもらい受けたことが記されている。其の他、京では方広寺の大仏や三十三間堂、知恩院、六角堂、金角（閣）など一五か所を参詣している。

久兵衛ら宿泊地及び諸経費表

（文）

月日	宿泊地	宿名	距離(里)	宿賃(5人)	食費(5人)	船賃(1人)	茶	酒	草鞋	煙草	肴	その他
7月18日	竹橋	太郎屋三右衛門	12	250	238		125					
7月19日	柏野	寺井屋平左衛門	8	200	234		31	85	12	16	80	
7月20日	吉先(吉崎)	大和屋勘治郎	11	250	240		117		10			河汁 20文、遺芋 12文 飯入古さ五枚 35文
7月21日	福井	杉谷屋五右衛門	9	275	225	25	47		7			
7月22日	脇本	問屋武右衛門	6	200	288		50	60	16			
7月23日	柳ケ瀬	米屋弥左衛門	12	175	307		15					薬 36文
7月24日	鳥(居)本	鍛冶屋利助	10	175	278		70					米(大こく)４文
7月25日	守山	伊勢屋久蔵	8	175	300	28	70					
7月26日	京都六条	六左衛門	8	960	1000							
7月27日												
7月28日						78						
7月29日												
閏7月1日	大坂	かわち屋庄右衛門衛	11	33	36		134					
7月2日					25	145	25					
7月3日	京都六条	六左衛門	11	1280	1300			35	14			御座敷拝見17文
7月4日												
7月5日	大津	むしろや	3	275	345		64					
7月6日	恵ち川	柴子屋彦六		160	240		17		23			
7月7日	木本	越後屋助左衛門	10	152	154		13		10	9		餅 10文
7月8日	今庄	玉屋清兵衛	8	200	200		6					髪手間 ４文
7月9日	福井	杉谷屋五右衛門	10	220	240		48		8			餅 ８文
7月10日	大聖寺		8	160	202		74		6			
7月11日	松任	上福僧屋	10	160	160		64		6	23		
7月12日	今石動	本庄屋仁兵衛	9	180	165		104	180				針 56文、江きん反 1850文 筆池 74文、手拭 1016文
7月13日	高岡						104					飴 ５文、手拭 530文 大門素麺 60文、茶碗 35文 饅頭 15文、針 54文、筆 76文

寺崎家文書「寛政九年上京ニ付道中ノ事書帳」寛政3年（1797）〔富山県公文書館蔵〕より作成

名苗家文書にある「初而上京入用留帳」を見てみると、天保十年（一八三九）十月十五日、葛葉村（現、氷見市葛葉）善太郎は同行六人とともに京都へ出立した。北国街道を通って、十九日木之本、二十一日に京都に到着している。二十四日伏見より淀川を川舟で下り、二十六日まで大坂に滞在し、東御房（現、難波別院）、西御房（現、津村別院）、天王寺へ参詣している。京都では、御絵伝、筆、ちりめん、風呂敷などを土産として求め、二十九日に京都を出立し、十一月七日に帰宅している。東本願寺の志納金として一両三歩（分）一朱も上納しており、旅行費用の約二十五％が上納されている。

京都での買物一覧

10月23日
10文　串２つ　　45文　扇子５本　　190文　扇子10本
34文　墨６本

10月24日
18文　筆５本　　110文　こうり１つ　　32文　火はし２本

10月27日
76文　数珠２連　　32文　数珠２連　　１貫128文　風呂敷４枚
400文　風呂敷２枚　　150文　風呂敷１枚　　150文　風呂敷１枚
184文　風呂敷２枚　　28文　数珠　　104文　香20
１貫400文　五尺ちりめん　　480文　一尺五寸の緋ちりめん
170文　御絵伝上下　　300文　筆60本

10月28日
75文　筆10本　　30文　筆10本　　100文　お菓子１袋

名苗家文書「初而上京入用留帳」天保10年（1839）〔個人蔵〕より作成

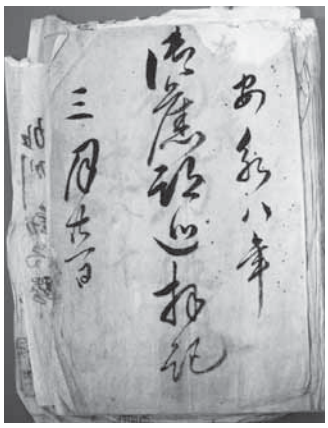
善太郎ら宿泊地及び諸経費表

（文）

月日	宿泊地	宿名	宿賃	舟賃	酒	茶	弁当	餅	柿	飴	柚	芋	酒粕	草鞋	備考			
10月15日	金沢	本倉屋	131	41														
10月16日	小松	野田屋与右衛門	115	3			8	5	3					6	草鞋１足	柿１ツ		手取川
10月17日	長崎	石屋三郎右衛門	149	17					6					16	草鞋２足	柿４ツ		吉崎御坊御明７文
10月18日	鯖波	米屋六郎兵衛	160	7			12							24	草鞋３足	柿６ツ		白鬼川
10月19日	木本	加賀屋与左衛門	131		16	1	10				3			20	草鞋２足	餅３ツ		木ノ本桑酒
10月20日	愛知川	松屋	135	11					9			8		10	草鞋１足	柿２ツ		姉川
10月21日	京都六条	福井屋	125				10		73									石山寺参詣
10月22日	京都	長左衛門																
10月23日	京都下数珠町	能登屋仁左衛門	116															
10月24日	大坂		53															東御坊（難波別院）1文
10月25日																		西御坊（津村別院）1文
10月26日														11	草鞋１足			天王寺参詣　12文
10月27日																		
10月28日																		
10月29日	愛知川	松波屋小兵衛	100	21														かがみ川橋7文 守山川橋6文
10月晦日	木本	加賀屋与兵衛	130											12	草鞋１足			高宮川橋2文 姉川橋2文 いもと川船10文
11月1日	鯖波	米屋六郎兵衛	65		9				4									枝豆16文、串柿2ツ
11月2日	船橋	柳屋宗五郎	60						3	1	5		7	11		柿２ツ	柚２ツ	しらき川14文
11月3日	山中		81			5			30									味噌豆腐17文、布団10文
11月4日	小松		104															酒かす3文
11月5日	金沢	本倉屋	117															酒かす3文、香物5文
11月6日	今浜	山口屋						11							草鞋１足	餅２ツ		髪月代16文、せんす２ツ
11月7日																		

名苗家文書「初而上京入用留帳」天保10年（1839）〔個人蔵〕より作成

親鸞・蓮如・二十四輩旧跡参詣



寺崎家文書「御旧跡巡拝記」安永8年(1779)〔富山県公文書館蔵〕

寺崎家文書の「寛政九年上京ニ付道中ノ事書帳」で東本願寺への参詣を記録した道中日記を紹介したが、他に、久兵衛のものと推定される安永八年（一七七九）「御旧跡巡拝記」、久次郎のものと推定される文化十四年（一八一七）「廿四輩巡拝の帳」がある。この二点の史料は、親鸞・蓮如旧跡関係寺院を参拝した証として各寺で記帳された部分と、寺が発行する複数の巡拝札とで構成されている。年号と日付があるもの、干支と日付があるもの、なにも書かれていないものがあって、どのような順番で寺を巡ったのか不明な部分があったので、ルートを特定せずに寺院の場所を地図上に落とすことにとどめた。

「御旧跡巡拝記」は、

A加賀→越前→近江→京（安永八年三月二三日から四月一七日）

B加賀→越前→近江→京（安永九年三月十六日から四月一七日）

「廿四輩巡拝の帳」は、

C加賀→越前（文化十四年二月十二日～十九日）

D加賀→越前→近江→摂津→京→近江→美濃→尾張→信州→越後→越中（文化十五年二月二十二日～文化十五年五月九日）

合計四回の旅及びそのルートが確認できる。

下の史料は久次郎の往来手形である。檀那寺婦負郡野口村願念寺が発行しており、旅の目的として「高祖聖人御旧跡」とある。「文化十五年寅二月」の日付からDのおりに携帯されたものと推定される。両方の史料にみえる参詣寺院は、

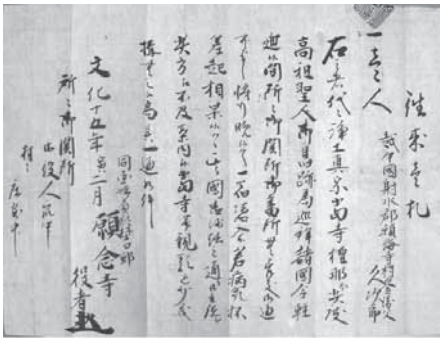
①「祖師御旧跡」「親鸞聖人御旧跡」「親鸞聖人形見名号」とあるように、宗祖親鸞の旧跡の由来をもつ寺院。

②「蓮如上人御旧跡」「蓮如上人六字名号」とあり、中興の祖蓮如の旧跡の由来をもつ寺院。

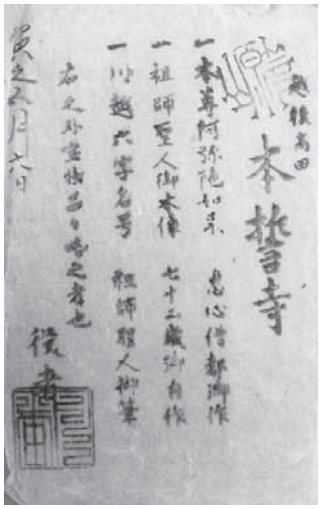
③親鸞・蓮如両方の由来をもつ寺院。

④「廿四輩性信開基」とあり、親鸞直弟子廿四輩の開基の由来をもつ寺院。

概ね以上に分類でき、単なる浄土真宗有名寺院巡りということではなく、明確に祖師やその弟子、中興の祖の旧跡を巡る旅であったことがわかる。寺院側も木版印刷の札を用意していることから、巡拝を受け入れる態勢もあったと考えられる。



寺崎家文書「廿四輩巡拝につき往来手形」文化15(1818)〔富山県公文書館蔵〕



越後高田本誓寺の札

越後高田

（印）本誓寺

一　本尊阿弥陀如来　　恵心僧都御作

一　祖師聖人御木像　　七十二歳御自作

一　川越六字名号　　祖師聖人御筆

右之外宝物品々略之者也

寅之五月六日　　役者（印）

親鸞・蓮如旧跡寺院参詣一覧

号年	十二支	月　日	地　　名	寺　　名	備　　考	史料名
安永八年（一七七九）	亥	3月23日	加州金沢	御坊役所（金沢別院）		「御旧跡巡拝記」
		3月23日	加州江沼	山田光教寺	蓮如上人開基	
		3月28日	加州吉崎	願慶寺	蓮如上人旧跡	
		4月6日	越州福井	本願寺役所（福井別院）		
		4月6日	越州福井	昌向山真宗寺		
		4月7日	越州福井	牛鼻山興宗寺	開基行如法師	
		4月7日	越州福井	和田山本覚寺	開基親性	
		4月7日	越州福井	本願寺御門跡掛所		
		4月8日	越州福井木田	橘宗賢	親鸞聖人旧跡	
		4月8日	越州福井	中野専照寺	真宗三門徒本山勅願所	
		4月9日	越州（鯖江）	上埜山誠照寺	親鸞聖人旧跡	
			越前鳥羽	本吉山万法寺	親鸞聖人直弟子賢信房開基	
		4月14日	江州高島郡岡村	法泉寺	親鸞聖人形見名号、蓮如上人六字名号	
			江州大物	念仏山宝憧院題専寺	親鸞聖人直弟明空房開基	
			（京）虎石町	法泉寺	親鸞聖人旧跡（遷化旧地）	
		4月17日	（江州）	（比叡山）大乗院	慈鎮和尚、親鸞聖人旧跡	
安永九年（一七八〇）	子		加州動橋駅	篠生寺	蓮如上人旧跡	
		3月16日	加州小松	弓波山西照寺	蓮如上人旧跡	
		3月16日	（越州福井）	足羽山和田本覚寺		
		3月16日	加州小松	松永山長円寺	蓮如上人旧跡	
		3月16日	加州江沼郡月津	牛鼻山興宗寺	親鸞聖人弟子但馬行如法師開基	
		3月23日	江州長浜	大通寺	長浜別院	
			江州遠賀郡大津	安養寺	蓮如上人旧跡	
		4月4日	城州宇治郡山科	本願寺兼帯所聖水山	蓮如上人、実如上人、證如上人旧跡	
		4月17日	江州長沢	福田寺	長沢御坊	
文化十四年（一八一七）	丑	2月12日		御坊役所（金沢別院）		「廿四輩巡拝の帳」
		2月12日	加州江沼	山田光教寺		
		2月19日	越州福井	本願寺役所		
		2月19日	越州福井	本願寺掛所		
		2月19日	越州福井	橘宗賢	親鸞聖人旧跡	
		2月20日	越州今立船・村	三霊山立光寺	親鸞聖人御旧跡	
			越州福井	牛鼻山但馬興宗寺	行如	
			越前福井室町	油屋勘左衛門	蓮如自画自賛真影	
			越前福井	昌向山真宗寺	法善	
文化十五年（一八一八）	寅	2月12日		吉藤御堂		
		2月13日	加州松任	坂本山本誓寺	親鸞聖人御旧跡	
		2月14日	加州小松	和田山本覚寺	親鸞聖人直弟子	
		2月19日	越前福井	本願寺役所（福井別院）		
			越前福井	牛鼻山但馬興宗寺	行如	
			越前福井	橘法橋宗賢	親鸞聖人御旧跡	
			越前福井	本願寺掛所		
			越州今立郡船枝村	三栗山立光寺	親鸞聖人御旧跡	
			越州横越	山元山護念院證誠寺	親鸞嫡家	
		2月22日	越前	出雲路山豪摂寺	親鸞聖人御旧跡	
			（敦賀）	敦賀円教寺	蓮如上人開基	
			越前敦賀郡山中駅	有乳山光伝寺	親鸞聖人御真筆阿弥陀如来	
		2月27日	西江州高島郡岡村	慈雲山法泉寺	親鸞聖人御名号、蓮如上人御名号	
			江州高島郡永田村	堅田山慈敬寺	蓮如上人御旧跡	
			西江州高島打下村	琵湖山最勝寺	蓮如上人御旧跡	
		2月27日	近江国志賀郡大物村	念仏山宝幢院超専寺	親鸞弟子明堂房旧跡	
			近江国志賀郡真野	獅子吼山法蔵院正源寺	蓮如上人御旧跡	
			近江国志賀郡今堅田	泉福寺	蓮如上人御旧跡	
			江州志賀郡	石山寺	蓮如上人御旧跡	
		2月29日	（江州）	（比叡山）大乗院	慈鎮和尚御旧跡、親鸞聖人自作像	
		4月1日	摂州蔦下郡溝杭	仏照寺	蓮如上人御旧跡	
			五条西洞院華園	大泉寺	親鸞聖人御旧跡	
			城州宇治郡山科	本願寺掛所	蓮如上人御旧跡	
			城州宇治郡山科小野庄	本願寺兼帯所聖水山	蓮如上人、実如上人、證如上人	
			（京）虎石町	法泉寺	親鸞聖人御旧跡（御遷化旧地）	
		4月6日	江州木部	遍照山錦織寺	親鸞聖人御旧跡	
		4月7日	江州愛智川宿	負別山宝満寺	親鸞聖人御旧跡	
		4月8日	濃州多芸郡多芸島村	福嶋山永寿寺	親鸞聖人御旧跡	
		4月9日	濃州墨俣宿	金足山熊谷院満福寺	親鸞聖人御旧跡	
		4月9日	濃州竹ケ鼻	西岸寺	親鸞聖人御旧跡	
		4月11日	濃州	渡河西方寺	親鸞聖人御旧跡	
		4月14日	尾州名古屋	御坊（名古屋別院）		
		4月14日	尾州名古屋	七宝山聖徳寺		
		4月14日	尾州名古屋	四宝山珉光院		
		4月27日	信州松本	木曽山義仲院長稱寺	親鸞聖人御旧跡	
			信州松本城下	大宝山佐々木正行寺	親鸞聖人御旧跡	
			信州松代	平林山本誓寺	親鸞聖人御旧跡	
		5月1日	信州善光寺	定額山善光寺	親鸞聖人筆十字名号、方便法身尊形	
		5月2日	信州長沼	成田山安養院西厳寺	蓮如上人御旧跡	
			信州水内郡平出村	彦坂藤兵衛	親鸞聖人筆九字名号	
		5月4日	信州相原	月原山明専寺	親鸞聖人御旧跡	
			信州	足立山野田長命寺	親鸞聖人御旧跡	
			越後頚城郡田海村	西蓮寺	親鸞聖人御旧跡	
		5月5日	越後荒井	御坊役所（新井別院）		
			越後頚城郡小出雲	照光寺	親鸞聖人弟子西願房旧地	
		5月5日	越後高田	御坊役所（高田別院）		
			越後高田	性宗寺	親鸞聖人御旧跡	
		5月6日	越後高田	光明山敬覚寺	親鸞聖人御旧跡	
			越後高田	井波園瑞泉寺	後小松院勅願寺	
			越後高田	歓喜踊躍山浄興寺	親鸞聖人御旧跡	
		5月6日	越後高田	本誓寺	親鸞聖人御旧跡	
			越後高田	中戸山西光院常敬寺	親鸞聖人御旧跡	
			越後	国分寺	親鸞聖人御旧跡	
		5月9日	越後外浪	大雲寺	親鸞聖人御旧跡	
		5月9日	越中宮崎	明光寺	親鸞聖人御旧跡	
			越中新川郡桜枝三日市	辻徳法寺	親鸞聖人御真筆十字名号	
			越中新川郡浜経田村	高龍山勝福寺	廿四輩性信開基	

おわりに

道中日記や巡拝札から多様な情報が読み取れたが、特に海内家文書の身延山関係の史料からは、身延山周辺のみならず、鎌倉や房総半島そして江戸の日蓮の旧跡や関係寺院へも参詣しており、三十日以上の日数と大金を費やして旅をしている。この海内家が特殊な事例ということではなく、調査の過程で確認した城戸家文書（現、滑川市）にある身延山関係の史料にも同様な傾向が見られており、江戸中期から盛んとなる日蓮宗の祖師信仰と関係があると思われる。

また、浄土真宗の開祖親鸞・中興の祖蓮如・二十四輩の旧跡や宝物がある参詣ルートも、寺崎家文書の巡拝札からそれがあったことがうかがわれる。身延山参詣同様に、広野家文書の往来手形の文言「祖師親鸞聖人旧跡」のように浄土真宗にも祖師信仰がり、寺院側も木版で印刷された巡拝札を準備していて、多くの参詣者に対応しようとしていた。

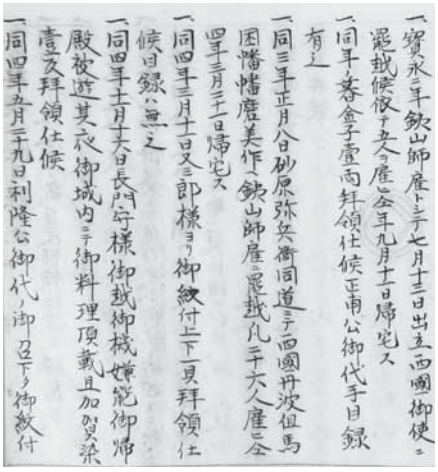
旅人は、多くの寺院の中から参詣場所をどのようにして選び出したのであろうか。それは寺院の由来や場所の情報をあらかじめ持っていたことになる。これは、「二十四輩道しるべ」のように出版物からの情報収集が中心であろう。この史料には、「油屋勘左衛門　蓮如上人自画安置」とあるように寺院ではなく、個人の情報までも記されているが、この場所にも久次郎は参詣し、巡拝札を手に入れている。この巡拝札には、「信證院殿蓮如上人　自画自讃御真影安置　越前福井室町　油屋勘左衛門」とあり、「二十四輩道しるべ」と同じ内容である。出版物を参考にし、参詣寺院が決められ、旅が計画されたのではないだろうか。様々な旅行案内書が出版されたが、その中でも、宗祖、直弟子、中興の祖の足跡や宝物の記事は、寺院を参詣したいという信仰心を高めてくれたことであろう。

旅の後は、餞別をいただいた村の人たちに土産を渡しながら、旅の情報を伝え、郷土の良さを再確認して、日常生活にもどったことであろう。

コラム参　富山藩主の密命による伊勢参詣

宝永二年（一七〇五）七月十三日、富山藩十村役高安豊助（たかやすとよすけ）は、伊勢参宮の旅に出た。表向きは参宮だったが、富山藩二代藩主前田正甫（まさとし）から密命を受けていた。西国へ下り、鉱山師を雇うためであったという。豊助の祖父金定が初代藩主利次の命で万治三年（一六六〇）から寛文八年（一六六八）までの九年間、野積谷（のづみだに）（現、富山市八尾町）で鉄鉱を採掘していたが、採掘法が不完全のために中止となっていた。それを正甫は豊助に命じて再興させようとしていたと考えられる。当時伊勢は、諸国からの参拝客でにぎわっていて、信仰の場所の他に情報センターとしての機能をもつ場所でもあった。また、全国の鉱山師を差配する「御吹（おふき）太夫（たゆう）」がいて、この御吹太夫の紹介で豊助は但馬国七美郡八木鉱山の鉱山師弥右衛門に会い、彼とともに大坂・京を回って丹波路から八月七日に但馬国に到着、各鉱山を見てまわった。八木鉱山の長兵衛、市五郎、同国美含郡久斗山の作左衛門、市右衛門に弥右衛門を合わせて五人を雇い、九月十一日帰国。さっそく採掘に当たるが、豊助は弥右衛門を同道して再び出発し、丹波、但馬、因幡、播磨、美作まで鉱山師を雇うために巡り、宝永四年（一七〇七）三月二十一日、二十六人を雇って帰国する。一年以上に及ぶ忍びの旅であった。前年の宝永三年には正甫は亡くなり、本格的な採掘は中止になった。

伊勢参詣を名目にして、鉱山師雇い入れのために二度の長旅に十村役が出た事例である。



高安家文書「高安家家譜」〔富山県公文書館寄託〕

企画展史料一覧

			資　史　料　名	所　　蔵	実物	パンフ	パネル	ポスター	チラシ
旅の手続き	旅の手続き	1	往来手形(文化10)	富山県公文書館(広野家文書)	○	○	○	○	○
		2	鞍骨村市郎右衛門等四人伊勢参詣につき請合状(宝永３)	個人蔵(藤井家文書)	○	○	○		○
		3	中老田村百姓久之助等二人 甲斐国身延山参詣につき猪谷関所過書願書(文政12)	富山県公文書館(海内家文書)	○	○	○		
		4	五拾六歳髪切女壱人五拾三歳髪切下女壱人 甲州身延山参詣につき過書(文化８)	富山市猪谷関所館(橋本家文書)		○	○		
旅の案内書	旅の案内図	5	藤田家道中記(弘化2)	富山県公文書館(藤田家文書)	○	○		○	○
		6	大日本早見道中記(安政元)	富山県公文書館(海内家文書)	○		○		
		7	天保改正袖中京絵図(天保12)	富山県公文書館(上埜家文書)	○	○	○		
		8	改正摂津大坂図(天保13)	富山県公文書館(上埜家文書)	○		○		
		9	改正絵入南都名所記(文政10)	富山県公文書館(上埜家文書)	○		○		
		10	大日本陸海全図(文久４)	富山県公文書館(広野家文書)			○		
		11	江戸全図(天保期)	富山県公文書館(広野家文書)			○		
		12	江戸買物獨案内(文政７)	魚津市立図書館	○		○		
	旅の心得	13	旅行用心集(文化７)	富山県立図書館	○	○	○		
		14	大日本道中行程細見(寛政７)	富山県公文書館(広野家文書)		○	○		
	旅の宿	15	浪花講定宿帳(安政３)	富山県立図書館	○	○	○		
道中日記の世界	善光寺参詣	16	「嘉永二年諸達諸届書」 姉の善光寺参詣につき過書方願書(嘉永2)	富山県立図書館(富山藩文書)	○				
		17	善光寺絵図	富山県公文書館寄託(五十島家文書)	○				
		18	善光寺参詣引札	富山県公文書館寄託(五十島家文書)	○			○	○
	伊勢参詣	19	伊勢参宮道中覚帳(寛政２)	個人蔵(塚本家文書)	○				
	身延山参詣	20	身延山鎌倉江戸北国海道道中記(文化元)	富山県公文書館(海内家文書)	○				
		21	諸山参詣御見舞覚帳(天保３)	富山県公文書館(海内家文書)	○				
		22	身延山道中記(江戸後期)	富山県公文書館(海内家文書)	○				
		23	道中諸書留帳(安政４)	富山県公文書館(海内家文書)	○				
		24	霊場参詣につき諸方見舞貰覚(安政５)	富山県公文書館(海内家文書)	○				
		25	身延山霊宝目録(嘉永元)	富山県公文書館(海内家文書)	○				
		26	身延山等道中記(元治元)	富山県公文書館(海内家文書)	○			○	○
	本願寺参詣	27	寛政九年上京につき道中ノ事書帳(寛政９)	富山県公文書館(寺崎家文書)	○				
		28	初而上京入用留帳(天保10)	個人蔵(名苗家文書)	○				
		29	上京并参宮大和廻入用記(文化10)	個人蔵(名苗家文書)	○				
	親鸞聖人二十四輩寺院巡拝	30	御旧跡巡拝記(安永8)	富山県公文書館(寺崎家文書)	○	○	○		
		31	廿四輩巡拝につき往来手形(文化15)	富山県公文書館(寺崎家文書)	○				
		32	廿四輩巡拝の帳(文化15)	富山県公文書館(寺崎家文書)	○				
		33	廿四輩御旧跡道しるべ(天保15)	富山県公文書館(石井家文書)	○				
	道中双六	34	新板加州金沢道中双六(江戸後期)	富山市郷土博物館			○		
コラム	伊勢参詣と十村役の隠密活動	35	宝永弐年覚書	富山県立図書館(富山藩文書)			○		
		36	高安家系図	富山県公文書館寄託(高安家文書)	○	○			
	旅先事故対応	37	旅人煩い病死の届方ニ付申渡書(元禄３)	南砺市城端図書館	○				
		38	北市村五郎兵衛倅三の伊勢参詣下向時につき江州坂田郡祇園村で死亡のため遺体引取一件につき上申書(元禄12)	個人蔵(玉井家文書)	○	○	○	○	○
	立山参詣見舞	39	立山参詣見舞請帳〔正吉〕(文政５)	富山県公文書館(石井家文書)	○				
		40	立山参詣見舞請帳〔吉次郎〕(江戸後期)	富山県公文書館(石井家文書)	○	○			
		41	立山参詣見舞請帳〔源之助〕(江戸後期)	富山県公文書館(石井家文書)	○				
		42	立山参詣見舞請帳〔石井豊二〕(明治21)	富山県公文書館(石井家文書)	○				

参考文献

『越中百家』（下巻）1973　富山新聞社
『富山県史　史料編　近世』 1978　富山県
『富山県史　通史編Ⅳ　近世　下』 1983　富山県
『大山町史』1964　大山町
『氷見市史６　資料編四　民俗、神社・寺院』 2000　氷見市
『大沢野町史』2005　大沢野町
『気賀御関所』2000　細江町
『近世女性旅と街道交通』深井甚三　1995　桂書房
『江戸の旅人たち』深井甚三　1997　吉川弘文館
『江戸の宿』深井甚三　2000　平凡社
『街道の日本史27　越中・能登と北陸街道』深井甚三編　2002　吉川弘文館
『近世寺社参詣の研究』原　淳一郎　2007　思文閣出版
『江戸の寺社めぐり』原　淳一郎　2011　吉川弘文館
『江戸の旅文化』神崎宣武　2004　岩波書店
『近世おんな旅日記』柴　桂子　1997　吉川弘文館
『江戸の見世物』川添　裕　2000　岩波書店
『江戸庶民の旅』金森敦子　2002　平凡社
『企画展　街道～越中を行き交う人々～』2001　富山市郷土博物館
『特別企画展　立山・富士山・白山みつの山めぐり　霊山巡礼の旅「三禅定」』2010　富山県［立山博物館］
『「旅―江戸の旅から鉄道旅行へ―」国立歴史民俗博物館研究報告　155』2010
『身延山信仰の形成と伝播』望月真澄　2011　岩田書院
『江戸切絵図を読む』祖田浩一　1999　東京堂出版
『地図で読む江戸時代』山下和正　1998　柏書房
『旅行用心集（生活の古典双書３）』八隅廬菴　1972　八坂書房
『新・旅行用心集』加藤秀俊　1982　中央公論社
『現代訳　旅行用心集』八隅廬菴 著　桜井正信 監訳　2009　八坂書房
『一外交官の見た明治維新』アーネスト・サトウ　1979　岩波書店
『全国古街道事典』（西日本・東日本編） 2003　東京堂出版
『日本交通史辞典』丸山雍成　小風秀雅　中村尚史　2003　吉川弘文館
『江戸物価事典』小野武雄　1983　展望社
『角川日本地名大辞典』角川書店
『国史大辞典』吉川弘文館
『日本史小百科　交通』荒井秀則・櫻井邦夫・佐々木虔一・佐藤美知男編　2001　東京堂出版
『江戸の旅は道中を知るとこんなに面白い』菅野俊輔　2009　　青春出版社
『富山県公文書館目録　歴史文書　一』1987　富山県公文書館
『富山県公文書館目録　歴史文書　九』1993　富山県公文書館
『富山県公文書館目録　歴史文書　十』1994　富山県公文書館
「近世越中関所の設置と規模」水島　茂　『富山史壇』第37号　1967
「富山藩西猪谷口留番所と通行者」高瀬　保『交通史研究』第16号　1987
「伊勢参宮道中覚書について」野村胎子　『富山史壇』第96号　1988
「越中の旅人たち～近世県内史料を中心に探る旅の様相」富山県公文書館歴史講座　資料　寺崎美希子　2008

江戸の諸物価（文化・文政期）

江戸時代、約260年間中、物価は様々に変動しました。
また、地域によっても違います。
あくまでも一つの目安として、下記の換算レートで計算してみてください。

１文＝25円
１貫＝1000文＝25,000円
１朱＝250文＝6,250円
１分＝４朱＝１貫＝1000文＝25,000円
１両＝４分＝16朱＝４貫＝4000文＝100,000円

食べ物
蕎麦（二八蕎麦）１杯＝16文＝400円
天ぷら蕎麦１杯＝32文＝800円
鮨（にぎり）＝８文＝200円
おでん１串＝４文＝100円
豆腐１丁＝12文＝300円

お菓子
串団子１串＝４文＝100円
桜餅１つ＝４文＝100円

飲み物
甘酒１杯＝８文＝200円
しるこ１杯＝４文＝100円
酒１合＝10文＝250円

旅
旅籠宿代１人＝200文＝5,000円
川の渡し銭１人＝90文＝2,250円

収　入
大工（１日）＝540文＝２朱40文＝13,500円
大工（月20日）＝10800文＝10貫800文＝２両２分３朱50文＝27万円
棒手振り（月20日）＝8000文＝８貫＝２両＝20万円

生　活
裏店長屋家賃（月）＝１貫=1000文＝１分＝25,000円
銭湯＝10文＝250円
髪結（大人）＝32文＝800円
按摩＝64文＝1,600円

参考文献『江戸物価事典』小野武雄　著

■交通機関

JR富山駅発バス

・北代循環〈県立図書館前〉下車……徒歩3分
・四方経由新港東口行〈県立図書館前〉下車…徒歩3分
・高岡小杉方面行〈呉羽山公園〉下車……徒歩10分

お問い合わせ先 富山県公文書館 〒930-0115 富山市茶屋町33-2
TEL 076(434) 4050 FAX 076(434)4093 http://www.pref.toyama.jp/branches/1147/